

垂水史談会報

2020(令和2)年
1月発行 垂水史談会
第37号

【報告】

垂水島津家墓地の清掃ボランティア

昨年の十月四日(金)、垂水史談会では早朝六時から伊集院会長以下十二名により、恒例の垂水島津家墓地の清掃ボランティアを行いました。約一時間後には驚くようにきれいになりました。

去る五月二〇日には垂水麓が日本遺産に認定されましたが、多くの歴史愛好家や旅行者が垂水を訪れて、麓集落の縄張り、残されている武家門などとともにも垂水島津家墓地を周遊しつつ、深い垂水の歴史を味わってほしいものです。



町田洋一前会長

令和元年度

鹿児島県文化財功労者として表彰

昨年十一月十一日、県庁に於て令和元年度の鹿児島県文化財功労者として、垂水史談会の前会長・町田洋一氏が表彰されました。垂水市史上巻の改訂版、垂水市史料集の編纂事業に従事されるなど、二十五年以上にわたる郷土史研究やお長屋の県文化財指定等の功績が評価されたものです。



今後とも垂水史談会の生き字引として、後進を導いて頂きたいと思えます。

【研究ノート】

軍一どんの映画館(終原・下)

篠原和義

六十年近い昔、六〇年頃の話だ。私は終原上かみの出だから、いつまであったのか知らない。思い出したのは、映画『ニュー・シネマ・パラダイス』を見た時だった。四〇年代のシチリア島の映画館の猥雑な雰囲気懐かしさが一度に込み上げてきた。ああ、これは下しもの方にあった映画館にそっくりだ。シチリアと終原(くぬつばい)、映画の観方は同じだ。

外観はもう忘れたけれど、中は地べたの土間で、四人ぐらいが座ると引っくり返りそうな平板の椅子が並んでいた。おそらく裸足や正月下駄、新品のズックがスクリーンの前部を走り回り、早く始めてくれという指笛も混じり、喧噪の渦だった覚えがある。始まったは始まったでフィルムがすぐ切れて、また大きな溜息が起きるのだ。もう各地で何回も回されて傷みもひどかったのだろう。あまり長く待たされると誰かの奇声と指笛がまた起きる。

横側の板壁戸の下の隙間から、始まる寸前に無賃で潜り込んで

【お知らせ】— どなたでもご参加ください —

毎月第四水曜日午後六時半から、垂水市民館で垂水の郷土史や文化財などについて、定例の勉強会を行っています。

『垂水市史』の読み合わせが基本ですが、資料を持ち寄つての勉強も行っています。また、市内に残る文化財や史跡めぐりなど、現地研修を行うこともあります。

入ってくる中学生もいた。毎回一本目は大好きなニュースであり、タイトルが映し出されるや否や、待ってましたとばかりおうおうと声上げて見入っていくのだった。上映中はここぞという場面では遠慮なく勝手に声を上げる子どもも多く、現在のようにな黙っているのではない。映画『モスラ』や『ラドン』の卵がかえる場面では静かに息をひそめ、赤胴鈴之助の真空切りでは大歓声。続けて主題歌の合唱だ。学校では声が小さいといつも担任に言われているのに。中休みになると、大友柳太郎の丹下左膳や怪傑黒頭巾の真似をして、片目をつぶり片袖をぶら下げたり、風呂敷に棒を入れて頭にかぶせたりして土間や外を歩き回っていた。

立看板は道路の海側にあり、下の方には道路の泥がいっぱい撥ねていた。唯一の記憶にあるのは、夜間映画『秋刀魚の味』の大ポスターだ。振り仮名を見て、ああこれは「さんま」と読むのだと知った。描かれていた立ち姿の女優さんは岩下志麻だったということになる。調べてみると六二年の作だから私は当時小学五年だ。これが引き金になっているのだろう、小津安二郎の作品は好きだ。

連れだつて映画館に出かけていた二歳下の弟と思い出を語ったことがある。

「かっどしゃしんに行つとか、と言われ、ばっばん(祖母)から小銭をもらっていたよね。」「正月料金というのがあったなあ。」「あん時は、正月料金だから三十五円と言われて中に入れなかったな。本当に見たかったのに。」「外に漏れている音を聞きながら板扉の節穴から覗いてみたら、赤胴鈴之助が見えたそう。館までは子供の足で四十分ぐらいかかる距離だったので、仕方なく近くの十円店でするめを買って帰ったというのが弟の記憶だ。

何度も観る大好きな映画の一つに『ミツバチのささやき』(スペイン・エリセ監督、八五年日本公開)がある。内乱を背景にしているが、つぶらな瞳が忘れ難い少女アンナが印象的な名作である。巡回映画の車が村に到着する冒頭のシーンを見る度に感激せざるを得ない。「映画だ、映画が来たよ。」と大喜びする子どもたち。「世界傑作の映画、観てのお楽しみ。」と語る興行主。私たちがまだか

まだかと、フィルムを荷台に乗せた自転車を道路に出て待っていたものだった。定刻通りに上映が始まった例がないのだ。垂水の本町からギーコギーコと自転車をこいで来ていたのだろう。

野山や浜で遊ぶ以外は何もない田舎にいた私にとっては、学校図書館や月一回の映画教室、ラジオ、映画館は楽しみだった。四〇年代のスペインの少女アンナが映画『フランケンシュタイン』を見て、現実と映像の間をさ迷ったように、私も暗闇の中で貧しい現実からしばし遊離して、未知の世界への憧れをふくらませていたのに違いない。

懐かしい「軍一どんの映画館」に感謝である。

(鹿児島市在住、終原出身・しのはら かずよし)

垂水空襲の焼夷弾か

昨年十二月末、垂水市中央町で住宅解体中に地中から戦時中の焼夷弾と思しきものが発見されました。約五〇センチくらいの六角形で錆びついていました。焼夷弾は爆弾とは異なり爆発の危険はなく、中に入っている焼夷剤が燃焼することによって攻撃目標を火災に追い込む兵器です。垂水市史料集などの記録によると、昭和二〇(一九四五)年八月五日に垂水市内中央部や終原、新城地区が米軍機による空襲を受けています。この時に夥しい焼夷弾が投下され焼け野原になりましたが、この焼夷弾はその時の一つと思われれます。



【日清戦争の記録】

忠魂碑 (日清戦争記念碑) ①

— 鹿児島神社 (俗に下宮神社) 内 —



(背面)

抑垂水村在甕城東南對岸拾海里餘往時藩主之支裔嶋津家所領戸口繁衍爲尅萬五千餘巨邑明治貳拾七八年之役村人從軍者甚多矣而能敵王愾忠奮義發挺身於砲煙彈雨之間連戰奏殊勲于異域終伏于劒或斃于病垂芳名于竹帛而克盡護国之重任者實爲左之七士矣嗚呼此壯烈炳々可

照千古者蓋非無所職由也

【注】

① 鹿児島本府、今の鹿児島市。② 一海里は約一八五二m。③ 第九主島津貴久の弟・忠将は垂水島津家の初代領主。④ 一八九四年に起こった日清戦争。⑤ 日清戦争の垂水村の戦没者。即ち、海軍水兵・關屋四之介、陸軍歩兵・児玉藤七郎、添田喜之助、平田岩吉、高野助二、葛迫作之助、陸軍砲兵・久保暎次郎の七人の戦死者。(垂水市史より)



【読み下し】

抑(そもそ)も垂水村は甕城(げいじょう)の東南對岸、十海里余に在り。往時(おうじ)、藩主の支裔(しえい)・嶋津家の領する所なり。戸口繁衍(はんえん)し、一万五千余の巨邑(きよゆう)為(た)り。明治二十七、八年の役に、村人の從軍する者、甚(はなは)だ多し。而して能(よ)く王の愾(いか)りに敵(あた)り、忠奮・義發、身を砲煙彈雨の間に挺(てい)し、連戰、異域(いいき)に殊勲(しゆこん)を奏するも終(つひ)に劒(つるぎ)に伏し、或(ある)ひは病に斃(たお)る。芳名(ほうめい)を竹帛(ちくはく)に垂れて、克(よ)く護国の重任を尽くす者は実に左の七士為り。嗚呼(ああ)、此の壯烈炳々(そうれつへいへい)、千古に照らすべき者は、蓋(けだ)し職(もっぱ)ら由(よ)る所無きに非(あら)ざるなり。

【口語訳】

そもそも垂水の村は鹿児島本府の東南對岸、十海里余(約19キロメートル)のところにある。むかし藩主・島津貴久の弟・忠将の子孫である島津家の所領で、戸口は一万五千余の多きに至る大きな村である。

明治二七〜二八年(一八九四〜一八九五)の戦役(日清戦争)では、垂水から大變多くの村人が從軍したのである。そしてよく(明治)天皇の(清国に対する)怒りに応えて忠義心を以て奮起し、その身を砲煙彈雨の間に挺しつづ連戦し、国外(朝鮮半島や中国)において上げた殊勲の手柄を天皇に奏上したのであった。(そして兵士は)ついに、或いは戦場で死し、或いは病気に斃れたものもある。誉れ高い名前を記録され、また立派に護国の重責に尽力したものは、実に左に掲げる七人の勇士である。

ああ、この壮烈で輝かしく、未永く光を当てる顕彰すべきものは、思えば理由がない訳ではないのだ。 — (以下次号) —

(読み下し等…上園正人、瀬角龍平)

— たるみず春秋 —

父と子の水切り遊び春立つ日 野間妙子

広い河口か暖かい浜辺かもしれない、父子で水切りをして遊んでいるのだ。水辺で拾った小石をくり返し投げて、水切りの数を競っているのだろうか。こんな遊びに一緒に打ち興じてくれる時間はいつまででしょうか。

立春という語は春の明るさと、いつかは来る親離れの哀しみまで併せて想像してしまいます。

(文章：瀬角龍平)